

インタビュー

サービスの融合・連携で、誰もが自然に使える、使いたくなるICTサービス創造を目指す

NTTのR&D体制強化の一環で本年7月1日、NTTサービスエボリューション研究所へと組織名称変更を行った同研究所の組織の概要、最近の重点的な取組み、今後の抱負について、茨木久所長にうかがった。

情報を活用した新たな価値創造 サービス/技術の研究開発を推進

——本年4月のNTT R&D体制の強化に向けた組織再編に続き、7月1日には各研究所の組織名を変更されました。貴研究所は、NTTサイバースリユーション研究所から、NTTサービスエボリューション研究所へと改称されましたが、改めて組織構成及び主要ミッションからお聞かせください。

茨木 私どもNTTサービスエボリューション研究所は、サービスを展開したり、生物学的に進化させたりとか、そういう意味を含めた研究所名になりました。新たなコミュニケーションサービスの研究開発を主要ミッションとする「NTTサービスイノベーション総合研究所」傘下の4研究所の1つとして、安心便利なホームネットワークサービスを実現するホームICT、ひかりTV、



日本電信電話株式会社
NTTサービスエボリューション研究所
所長 茨木 久氏

NOTTVなどに代表されるコンテンツ流通系サービス、それに情報検索・マイニング系の3つのサービス技術領域とそれを支える要素技術の研究開発を行っています。

——名称が変わったことで、何か変化したことはありますか

茨木 一番変わったことは、一つひとつのサービスの固まりというよりは、それをいかに融合・連携させて新たなサービスにするか、エンドユーザー一人ひとりに適切なサービスを組み合わせる提供するかを含めた全体の連携をどうしていくのかという点に関連した新しい技術を含め、取り組んでいくことが重要と考えるようになったことです。具体的には、サービスを上手く融合・連携させ、1+1+1=5とか6のサービスを提供していくための研究開発です。

サービスエボリューション研究所

第一推進プロジェクト

より安心して便利なライフサポートサービスを実現するホームICT基盤サービス/システムの開発

第二推進プロジェクト

行動を支援するモバイル検索サービスに向けた検索基盤システムの開発及びコンテンツ流通サービス拡大に向けた事業家推進・サービス/プロダクト開発

ビジネスプロモーションSEプロジェクト

NTTグループ各社との連携による研究所横断的なビジネスプロモーション活動及び国内外の大学との組織的連携の推進

サービス方式SEプロジェクト

体系的・継続的な新サービスの創出に向けたサービスアーキテクチャデザインの研究開発及びサービス可視化

メディアコンピューティングプロジェクト

人や企業の行動を支援する情報ナビゲーションサービスの実現に向けた行動モデリング技術、情報インデクシング技術、情報マイニング技術の研究開発

ヒューマンアプライアンスプロジェクト

多様な情報機器、NW、アプリケーションPF環境連携による高度なNWサービス提供に向けたマルチモーダルUI制御、分散システム協調制御、コミュニケーションアーキテクチャ技術の研究開発

ヒューマンインタラクションプロジェクト

誰もが簡単に自然に使える、使いたくなるICTサービスの実現に向けたユニバーサルデザイン、メディアインタラクション、ライブログ構造化の研究開発

図1 NTTサービスエボリューション研究所の組織構成と主な取組み

コンテンツ流通系サービス、それに情報検索・マイニング系の3つのサービス技術領域とそれを支える要素技術の研究開発を行っています。現在、多種多様なデバイスやネットワークを流通する情報を活

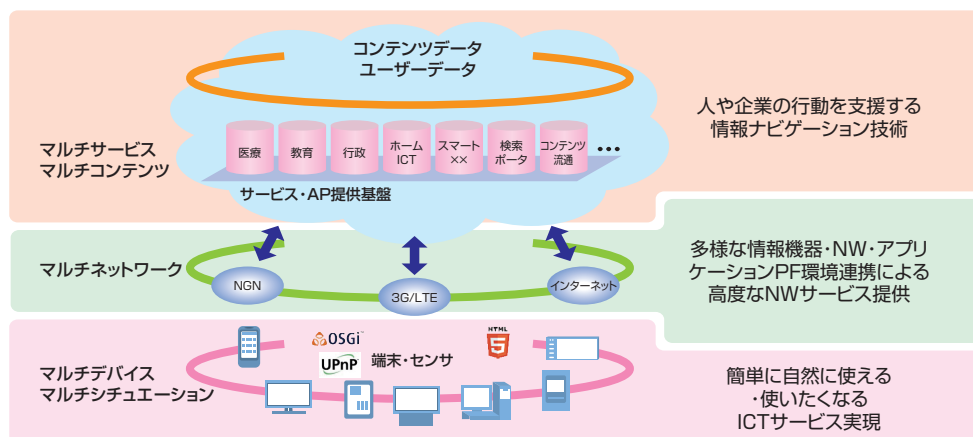


図2 NTTサービスエボリューション研究所の取組み（技術領域）

融合・連携を軸に、デバイス、ネットワーク、サービスの3層での研究開発を推進

—そのための重要な技術として、どんなものがあげられますか。

茨木 図2に示したように、マルチサービス、マルチコンテンツを、マルチデバイスであらゆるシーンで、マルチネットワークを介して使える環境にするための方策として、端末層とネットワーク層をどのように連携するか、サービスのサポートツールをいかに提供していくかに取り組んでいます。例えばサービスのデザイン/評価という面では、ユーザーのQoE（Quality of Experience）をどう上げていくかということが重要だと思います。それから、OTT（オーバーザトップ）サービスやHTML5というキーワードも関連しますが、マルチデバイスがマルチネットワーク/マルチシチュエーションで使われるという環境をどう整理してサービスをお届けするかが重要になってくると思います。さらに、

複数のサービスを連携させて新たなサービスを創出するため、上位側のサービスオーケストレーションの機構を賢くするためのライフログ活用・マイニング技術などが必要になります。また、従来から取り組んできたサービス可視化については、R&D成果である技術の実用化を後押しする取組みに加え、より将来的なサービス実現を目指した取組みを強化しています。

誰もが自然に使い、使いたくなるサービス創造への貢献を目指す

—後続の各論の頁で、最近の取組みをいくつかご紹介しますが、特にR&D施策として、今年度意識されていることはありますか。

茨木 サービスエボリューション研究所ですので、“サービス創造にいかに関与するか”という部分をどう強化していくか、そのために必要なことは何かということ意識しています。そこには、前述したエンドユーザーが使いやすいという観点での技術と、NTTグループの事業にと

って意味がある技術の両面を常に考えて取り組むようにしています。それとは別に、“将来のサービスはこうなる”というのは別の議論ですので、着実に事業に貢献する研究開発と、ビジョンとしての研究開発を分けるようにしています。着実にやる部分では、サービス融合・連携について、いかにエンドユーザーが使いやすく、使いたくなるサ

ービスを創造するかという視点で取り組むことが重要だと思っています。そうでないとサービスは展開できないし、逆に進化もしません。進化のための先々の研究開発と、サービスを展開するための研究開発の2つの意味が「エボリューション」の中に込められています。

—最後に、研究者へのメッセージをお願い致します。

茨木 昨年7月に所長に就任した際に、“跳んで欲しい”という話をしました。跳ぶというのはどの方向に跳んでも良くて、どうしても世の中に出したいサービスと思うのであれば、そっちの方へ跳べば良いし、技術として世界一にしたいというのであれば、その方向へ跳べば良いわけです。今年も同じで、先々のことをやるなら先に跳べですし、事業に貢献することでしたら事業サイドにグッと跳ぶという活動を行うことが重要だと思います。

—今日は有り難うございました。

（聞き手・構成：編集長 河西義人）